

シベリア抑留を思う

長野県 池上 博

昭和十七年一月十日、松本歩兵第一五〇連隊に現役兵として入隊する。入隊間もない一月二十日に宇品港を出港して朝鮮の釜山港に上陸。上陸後間もなく列車に乗り鮮満国境を通過し、一月二十四日、満州国奉天の開原に到着。同日、歩兵第十九連隊に配属となる。

開原において約二カ月の教育を受け、三月二十九日、牡丹江省穆稜に移動し勤務につく。昭和十八年二月十日付で第九師団司令部転属を命ぜられ、穆稜より掖河に異動、第九師団司令部勤務となる。八月、兵長に昇進する。

昭和十九年六月二十二日、再度転勤命令が出て、間島省間島の第三軍司令部勤務となる。八月九日、ソ連軍進入。司令部と共にこれと交戦。

八月十五日終戦となり、翌十六日、間島において武

装解除を受ける。しばらくして十月八日、間島を出発十日余りの強行軍、野宿を重ねながらも、日本に帰れることを信じて専ら歩いたのに、着いた所はシベリア鉄道の名も知らない小さな駅。ここで貨車に乗り、数日後着いた所がシベリアのホルモリンという所。この第二〇一収容所と呼ばれる粗末なバラックに二千人が入る。宿舎は板の床が二段になっている。

食事と言えば高粱か粟の粥少量。時には黒パンといった粗末なもの。作業は木材の伐採、運搬、ドームの建設。伐採部が二人挽きの大きな鋸で伐採した木材を、運搬部が外部より来る馬により運搬する。一定量の木材がたまとドームの建設に掛かる（ドームと言っても、丸太を組み合わせ湿地からコケを取って来て隙間に詰めたもの）。終わるとまた、伐採に掛かるといった作業の繰り返し。一日の作業を終え、収容所まで一時間の行程。零下三〇度を超す寒さ、一日の作業の疲れでへとへとになって帰り、名ばかりの夕食を終え床につく。一日の疲れを癒すどころか、南京虫、シラミに悩まされ、安眠もできない有様。

こんな中で栄養失調と重労働の疲れで斃れる者が続出する。

やがて春になり草木の芽が吹くころになると、お互いに缶詰の空き缶を拾ってきて、腰にぶら下げて行き、作業の合間に草木の芽を摘んで缶で茹で岩塩をかけて食べ、空腹を凌ぐのが一つの楽しみとなる。

その後、コムソモリスクの収容所に移動となり、ここでは道路工事の作業、時にはホルホーズの馬鈴薯の選別作業に回されることがあり、楽しみの一つだった。このころよりアクチブと呼ばれる人たちが来て、民主教育が盛んに行われる。この教育を受けないと日本には帰さないと言われ、仕方なく受ける。

シベリアの冬も近づく十月末、待ちに待った東京ダモイの列車に乗り、十月二十六日ナホトカに集結、迎えの引揚船が入り乗船が始まる。後の方にいた私の所までくると、ここより後は待てと言われ三、四十名が戻される。何事があったのかと心配していると、軍司令部にいた者は当時の調査があるということだった。それから一カ月余り、旧関東軍の軍司令部のことにつ

き詳細な調査が始まる。軍司令部の仕組み、仕事の内容等詳細にわたって調べられる。

ナホトカの港が凍結寸前の十一月二十日、待ちに待った復員船に乗ることができた。昭和二十四年十二月五日、懐かしい日本の土を踏むことができた。

七年ぶりの我が家へ戻って見ると、一緒にナホトカまで来た戦友たちが、確かに一緒に乗船したのに舞鶴に上陸したとき、いなかったがどうしたことだろうと心配し、八方手を尽くし探したがわからず、大変な騒ぎになっていたようだった。何はともあれ、無事に帰ったことを喜び合った。

シベリア抑留記

京都府 中西 昇

現住所 京都府船井郡丹波町字八田

職業 農業 大正八年十一月十八日生 元陸軍兵長

昭和十八年五月一日、二回目の召集をうけて現住所